百日間闘争へ突入せよ

三～五月三里塚激闘の地歩打ち固め

労働者運動の革命的飛躍かちとれ

全国の闘う労働者諸君！　日本帝国主義は、ブルジョア階級支配の存亡をかけ全人民の反対を押し切って成田開港を強行した。また、こうした中で六月一三日、三・二六戦闘で重傷を負った新山幸男君が死亡した。東山君につづく権力の虐殺に満身の怒りをこめて弾劾するとともに、われわれは全力でこの報復と新たな闘いに決起しなければならない。反対同盟の決意で明らかなように闘いはこれからであり、さらに「百日間闘争」の中で実力闘争、ゲリラ戦、あらゆる手段の闘いを一層強め、二期工区戦勝利、空港完全廃港を必ず実現するであろう。

五月二〇日、三里塚反対同盟と全国の闘う労働者人民は、敵日帝国家権力の総力をあげた戒厳体制を打ち破り出直し開港に巨大な痛打をふりおろした。

三・二六管制塔占拠、破壊と三・三〇開港爆砕の輝かしい勝利をひきつぎ、全国から進撃した二二〇〇〇の戦闘的労農学は、五・二〇決戦の未曽有の高揚をかちとった。そして実力廃港への新たな攻勢を画する歴史的な一頁をを日帝ののどもとにつきつけたのである。

当日、早朝の地下同軸ケーブル切断による航空機能の完全マヒにはじまり、日帝一三〇〇〇の機動隊による二重三重の軍事網を、またもやズタズタに寸断し、各所で撃破した。

再び北総台地を火炎のルツボにたたきこみ、第五ゲートを、山田レーダーサイトを、そして御宿ボルタックを猛攻し、またVOR（超短波全方向無線標識）の全壊をかちとった。

いまや、三・二六の歴史的快挙を実現した三里塚農民、と全国の闘う労働者人民の強固な団結とその力は、敵日帝国家権力がおよそ動員しうる全ての弾圧機構をもってしても、おしとどめえないことを満天下にさし示したのである。

三・二六の快挙によってうちのめされ、三里塚三月開港を断念した日帝は、この事態を自らの支配の危機と受けとめ、その深刻さゆえに、福田の大号令下、起死回生の出直し開港を準備してきた。だからこそ、三里塚農民と全国の闘う労働者人民に対しては、あらん限りの報復的弾圧をもってのぞんでおそいかかってきたのである。反対同盟戸村委員長の一連の発言に対する破防法どう喝、成田破防法の強行と発動、大量起訴と長期勾留、また検問と捜索、一三〇〇〇人の機動隊の配置、ピストル、ライフル実戦部隊の実戦配備、またマスコミを総動員した、連日の「過激派」キャンペーン、官公労の闘う労働者に対する即刻「懲戒免職」処分攻撃など、およそ枚挙にいとまがない。

また運輸省、千葉県当局、自民党千葉県連、更には総評富塚を尖兵とした〝話し合い路線〟によって、三里塚農民の闘いを解体せんと乗り出し、もって全国の闘う労働者人民との分断さえ画策してきた。だが、五・二〇決戦は、かかる日帝の絶望的あがきのひとつひとつを決定的に粉砕してかちとられた。

昨年五月、あの憎むべき大鉄塔破壊、また東山氏虐殺の二大奇襲反革命暴挙が、三里塚四日間戦闘の階級的報復戦をよびおこしたように、三・二六快挙にうちのめされた日帝の階級的憎悪をむき出した相次ぐ反革命攻撃は、またもや、これらの闘いをひきつぐ三里塚農民と全国の労働者人民の実力進撃の前に、木端微塵に打ち砕かれた。うちのめされた日帝は、五・二〇開港を直前にして、欺瞞的にも、「二期工区の凍結」云々と、その場しのぎの甘言をちらつかせながら、三里塚農民に対して〝話し合い路線〟を提唱し、あわよくばこれにひきこみ、分断、解体にいたらせようとした。

だが、三里塚反対同盟は、この攻撃の本質をだれよりも鋭く見抜き「もはや一切の話し合いに応じない」（五・一七声明）とキッパリ拒否し、完全廃港まで闘い抜く決

（二面につづく）

第５ゲートを脅やかす圧倒的デモ（5.20）

夏期一時金五割カンパを集中せよ

共産主義者同盟

全国の『游撃』読者のみなさん！　七八年夏期一時金カンパ闘争を迎えて、日本階級闘争の革命的発展とこれを指導する強大な革命党建設の大事業実現のために、同志友人諸君の総力決起を訴える。

三里塚闘争をはじめとする全人民の憤激の爆発は、階級闘争の武装的性格をより鮮明化した。日帝ブルジョアジーは、より腐朽性を深め予防的反革命攻撃の乱発によって、この乗り切りを策している。〝死滅しつつある資本主義〟としての局面を一層あらわにしているのである。他方、個々的な階級憤激の細流は、社会主義革命の条件とその下準備を要求しつつある。まさに日本プロレタリアートが、その指導性と党派性をはっきりと示さざるをえない歴史的成熟段階に突入せんとしているのである。

われわれは、こうした階級闘争の転質をはっきりと見きわめマルクス・レーニン主義党の建設によって、これに応えなければならない。とくに今日の権力の攻撃が示すように、政治警察との闘争に打ち勝ち、不抜の非合法中央集権党を建設することによってのみ、現在の厳しい階級情勢の水路を切り拓くことができる。

われわれは、これまで反スタトロツキズム、急進民主主義の克服に全力をあげてきたが、これは同時に、労働者階級の多数派獲得に向けて、わが党の階級基礎を一層打ち固めていく唯一の回路である。階級の党であるかぎり、労働者人民に本当に支持され、信頼される党でなければならない。われわれは、こうした党への転換を成し遂げ、必ずプロレタリアートの指導政党とならなければならない。

もとより、かかる党建設にとって財政問題の革命的解決は生命線であり、また階級との結びつきを示すメルクマールでもある。今春三里塚決戦の戦士として敵の手中にあるわが同志の奪還をはじめ、全国党建設への本格的突入は、財政体制の強化、確立なくしては空語と化す。夏期一時金カンパ闘争に全力をあげ、党建設の強力な土台としようではないか。

振替　東京〇―一九五七八三

7・2 三里塚現地闘争 ―「百日間闘争」に決起せよ―

游撃

共産主義者同盟政治機関紙

第44号
1978.6.5
定価 150円

発行人　北沢晋
発行所　游撃社
連絡先　東京都世田谷区千歳郵便局私書箱4号
振替　東京0－195783
10回2000円（開封・送料共）
2500円（密封・送料共）

☆帝国主義の腐朽性に抗し、社会帝国主義・社会排外主義と対決して世界革命の最前線へ！
☆日帝の朝鮮侵略反革命を国内戦へ転化せよ！
☆帝国主義心臓部にプロレタリアートの総蜂起を！

今号の内容

☆新山君虐殺弾劾！七・二三三里塚現地闘争へ結集せよ！
☆本山闘争報告
☆南朝鮮階級闘争の激化と新たな転換軸（その一）
☆学習欄『共産主義と左翼小児病』

意をうち固めたのだ。
今日、一三年をこえる三里塚闘争は、三・二六を頂点としたこれらの闘いの中で、いよいよ、日本階級闘争の管制高地たるその位置を不動のものとしてきた。すなわち、この反対同盟農民の闘いとこれに結びつく全国の労働者階級の闘いこそ、三・二六勝利がはっきりさし示したように、日帝の心臓部をつき刺し、彼ら帝国主義ブルジョアジーをして、もはやいままでどおりにやっていけないことを感じさせ、死の苦悶へとたたき込みつつあるのだ。

日帝の反革命治安攻撃を粉砕せよ

こうした中で日帝ブルジョアジーは、三里塚に大結集し、三・二六を頂点とした闘いを最先頭で担い切った全国の闘う労働者人民の力が、そのすそ野においては、広汎な現状の打開を訴える大多数の労働者、勤労被搾取大衆の不満、憤激に基礎をもち、現状においてすら、自らの政治支配をつき動かす巨大な奔流となってほとばしり始めていることをいやが応にもおもい知らされざるをえない。そしていまや、これらの闘いの中から、この命脈つきかけたブルジョアジーにとって代わるべき、日本プロレタリアートが荒々しく成長しつつあり、まさにプロレタリアートの歴史的任務を果たしうる力となって、三里塚闘争を頂点とした階級闘争を新たな転換へと向かわしめんとしていることもである。だからこそ、日帝は、この闘いの火の手が「成田は革命運動だ」「成田の問題は、日本全体の治安問題だ」と身構えて、三里塚をめぐる攻防のすべてを、革命と反革命との尖鋭な対立として受けとめてきているのだ。

このことは、さきに読売新聞（四・一五付）が発表した成田開港問題の世論調査に対する自民党の態度にうかがい知ることができる。すなわち『自由民主』は、ことに「過激派の行動について」のアンケート結果をひきあいに出しつつ、「法と秩序に反するもので絶対容認できない」二八%と「現状ではやむをえない」一〇%（ちなみに、ほぼ同時期、同新聞の世論調査で、福田支持率二〇%）の数字をあげて「もはや四人に一人は過激派だ」と悲鳴をあげ、いまや、この相互の尖鋭なせめぎ合いに入っていると、自ら危機感を煽りはじめているのだ。そして、「過源派には百日裁判を」をはじめ、あからさまな革命党、革命派に対する予防反革命攻撃のなみなみならぬ決意のほどを余すところなく暴露してきているのである。

日帝は、「過激派封じ込め」と称して、公然と自衛隊の治安出動を示唆してはばからない。いまや議会政党間の「自衛隊違憲論議」をよそに、その頭目たる福田にあっては、「(自衛隊の)事前出動は、治安出動の準備にはならない。防災出動が十分に行われてきたその結果、治安出動の時に多少の訓練になる副次的効果がでてきてどこが悪いか。むしろ国費を効率的に使うものであるというくらいの気持がいたします」(衆院災害対策特別委）と、いまや具体的な自衛隊の治安出動、内戦鎮圧実戦部隊としての登場を、露骨に宣言し、準備しているのだ。「地震対策特別法」の立法化策動こそ、その布石と言わなければならない。

また他方では、さきの四与「野」党共同提案の成田治安立法の強行発動に続き、「過激派対策」と称して「弁護人抜き裁判法(刑事裁判暫定的特別法案)」を画策している。

いまや彼らは、マスコミを総動員して一挙的な「過激派キャンペーン」を大々的にくり広げ、少年法、監獄法改悪、刑法改「正」と一直線に、治安維持、予防反革命のための法制度の一挙的な再編にのりだしてきているのだ。自らの政治支配の危機があからさまになりつつある日帝にとって、もはやそこからの脱出口は、こうした絶望的あがき以外、何もないのである。

そしてまた、こうした国家暴力の発動によって革命的労働者人民の決起を根こそぎ鎮圧したいという敵日帝権力の攻撃は、より陰湿で卑劣なものとなってきている。

わけても、われわれはこの三里塚攻防のなかで鮮明になった官公労の闘う労働者に対する露骨な報復的「処分」攻撃こそ、しっかりと見てとらねばならない。何よりもそれは、三里塚闘争が、全国の労働者階級の闘いとしっかり結びついていること、労働者階級の闘いとして拡大

空港粉砕・二期工区戦勝利・新山君虐殺糾弾！
労働者統一実行委の強化と拡大をもって
革命的労働者階級人民の総決起を！

発展していることに対する日帝の危機感のあからさまな表明である。鉄路の主人公としてジェット燃料輸送の拒否から阻止へとふみこんだ動労千葉地本の戦闘的労働者をはじめ、労働者階級が現地へ決起している現実に、自らの支配の危機を階級的本能として直感せざるをえないのである。

5.20開港阻止現地闘争に全国から22,000の結集

だからこそ、日帝は三・二六管制塔占拠戦士ー全逓労働者二名に対し、ただちに国家公務員法八二条を発動し、前代未聞の逮捕即「懲戒免職」処分をふりおろし、また同様な「処分」攻撃を闘う電々・国鉄労働者などに一挙的に拡大してきているのだ。われわれは、その顕著な例を五・二〇を前にして発動された、公務員、公共企業体労働者に対する異例の官房庁長官通達ー綱紀粛正、三里塚に行くなーに見てとれる。

こうした中で、全逓などでは、局長クラスの職制が、緊急職場集会をひらき「この職場から逮捕者は絶対に出させない。三里塚に行くな」とあけすけにどう喝を加え、また五月一八日〜二〇日にかけての全逓労働者の年次休暇申し入れに対しては、職制が家族まで動員して説得にあたるという前代未聞の事態すら起きているのだ。しかし、これらの事態は、どれをとっても帝国主義自らの支配の動揺の深刻さを満天下に暴露するものにほかならない。まさに反対同盟農民と全国の闘う労働者人民の一〇年をこえる激闘の歴史は、いまやこうした反革命攻撃を打ち破る力量をわがものとしつつあるのだ。三・二六の偉大な勝利こそ、その号砲であり、五・二〇の闘いは、この勝利の地平を更におし拡げ、反革命攻撃に対する闘う労農学のキッパリした回答を示したのである。弾圧の嵐に抗し、わが共産主義革命戦線の獄中同志たちが示しているように、闘う労農学は、獄中にあっても、決然と完黙非転向をつらぬき、三里塚闘争を、そして革命党と全国の闘う労働者人民の闘いを防衛する闘いの最先頭に立っているのだ。この獄中戦士の苦闘に応え切り、わが隊列、革命的労働者人民の陣営に一日も早く奪いかえさなければならない。

革命的労働運動の指導部建設へ

日帝福田は、総力をあげた国家暴力の発動をもって、出直し開港にふみ切った。彼らは、戒厳令をもってしか全国の労働者人民の決起に対処しえないのである。

だが、こうした支配階級の危機は、それにとってかわろうとする階級と党に、大きな飛躍を要求[illegible]。

だからこそ、われわれは今春の三里塚を頂点とする階級闘争が切り拓いた基本構図を厳格につかみとり、このことに真に応えうるわが党建設の革命的転質をこそかちとらなければならない。

まさに、こうした転質をかちとることを可能とする勢力と力は、全国の労働者、農民を結集した三里塚の激闘の中にこそ存在する。

今日、三里塚を頂点とした闘いの中で、活性化する労働者階級人民に対し、日帝は自らの階級支配の危機感をつのらせ、闘う人民に対する暴力と抑圧の反革命攻撃を激化させる。「構造不況」深刻化の中で、より一層の労働者大衆への矛盾の転化、犠牲の集中をもって階級的延命をはかろうとする日帝にとって、充満する労働者階級、勤労被搾取大衆の不満、憤激の細流が、革命党ー先進的労働者の闘いに結びつくことこそ、もっとも恐怖なのである。だからこそ、この事態の中にこそ、われわれはふみこみ、広汎な労働者階級の活性化に確固さを与え、統合し、日本階級闘争の歴史的転換をわがものとしなければならない。

労働者階級人民の闘いを更に確固とする上で、われわれが忘れてならないのは、労働運動内部に巣食う一部の労働貴族の排外主義たる本性を暴露し、これと闘うことである。

今春の三里塚闘争が示しているように、もはや既成の「革新」は、今日の事態を根本的に解決する能力も決意も持ち合わせていない。いまや「雇用確保を兵器国産化で」（造船重機労連）をかかげ、「企業防衛」を旗印しに資本の手代となって、首切り合理化をおし進めている同盟JCは論外としても、もはや総評民同労働運動においても、その指導部の腐敗は進行している。総じて既成労組指導部は、日経連の提唱する「生活防衛と企業防衛」の「同心円的解決」に唱和、屈服している。そしてあげくの果てには今春の園遊会における天皇ヒロヒトの「どうですか、このごろの労働界は」との質問に、中立労連樫山が「大変むつかしい時期ですので責任をもった立派な運動をやっていきたい」と答えたことに象徴的なように、資本主義を維持し、救済することに、応分の社会的「責任」をもつ労働運動を、労働者大衆に要求する始末である。既成労働運動指導部に巣食う労働貴族どもは、いまや現状の困苦を訴える労働者大衆に、賃金抑制、首切り労働強化、失業を耐えしのべとさえ説教してまわっているのである。

全逓の全郵政との統一方針や「民主的規制論」、日「共」の教師聖職論など、そのあらわれは数多い。

とりわけ、今日、権力の「全逓名古屋中郵事件」に対する反動判決に示された労働運動への露骨な弾圧に対する全逓中央の屈服はその象徴的な事態である。すなわち彼らはこの反動判決におそれをなし今春闘における「スト中止令」を早々と出し、そればかりか、不満を訴える青年労働者に対しては組合統制攻撃をちらつかせる始末なのである。

勤労人民、農民と共に完全廃港へ

そしていまや、彼ら既成労組指導部によって次のようなことすらひき起されているのだ。

すなわち、こうである。全逓A地本のある戦闘的労働者が今春の三里塚闘争に決起し、不当にも逮捕、起訴される事態がおきた。権力は、すかさずこの労働者に対して、「処分」攻撃をかけてきた。当然にも、職場、地域の仲間が、この攻撃に対する反撃にたちあがった。だが、この事態に直面した全逓中央、全逓A地本青年部の対応はどうであったか？ 彼らは、「三・二六は、春闘統一行動日であった。当日、三里塚に参加したものは、組合の統一と団結を乱した破壊分子である。それゆえ、統一被告団から抜けないかぎり支援しない」というのである。これほど彼ら既成労組指導部の今日の姿を如実にものがたるものはない。彼らは、「統一と団結」と称して権力弾圧を容認し、あげくの果ては、権力になりかわって、この戦闘的労働者に転向を強要し、獄中闘争の破壊すら画策しているのである。

全国の闘う労働者諸君！ とりわけ三里塚に結集してこの三〜五月の激闘を切り拓いた先進的労働者諸君！

諸君は、あの激動の三里塚に決起し、これらの闘いを最先頭で担い切ることによって、三里塚闘争を日本階級闘争の管制高地としてうちきたえ、日帝を心底から恐怖のどん底にたたきこんだ。

この三里塚に結集する闘う労働者の力こそ、真に日本の労働運動の現状を打開する可能性を秘めた力である。いまや、既成労働運動に巣食う労働貴族どもにとって代り、大多数の労働者大衆の現状の困苦を打開する指導部として、百倍の大胆さをもって、労働運動の現状にふみこまねばならない。われわれはまず、自らの職場、地域の仲間に可能な限り、三・二六そして五・二〇に代表される三里塚の闘いを紹介し、その意義を説明しなくてはならない。そして、三里塚闘争を支持発展させる労働者大衆のより広汎な布陣を、具体的な行動とともにつくり出さなければならない。

だが、それだけに自らの任務と活動をきりちぢめてはならないことも確かである。今日、総理府統計局の調査ですら、完全失業者は百二十三万万人であり（四月分）、ちなみに資本の不況合理化、首切りをまっさきに受けた臨時、パート、出稼ぎ、高年令者、「障害者」、婦人労働者など統計にものらない潜在的失業者をも合わせると、じつに数百万ともいえる労働者群が、生活苦にあえいでいるのだ。そればかりか、今日の「構造不況」の嵐は、とりわけ、中小零細未組織労働者、社外工、時・パート、日雇労働者におそいかかり、彼らをして、もはや「失業は明日の我が姿」と感じざるをえないところまで追いつめているのだ。そして、事実、彼らの直感を裏付けるかのように賃金カットから首切りに及ぶ種々の困苦がたてつづけに襲っている。

相次ぐ企業倒産は、このことを別の角度から明らかにする。たとえば、先月（五月）の企業倒産数（負債一千万以上）は一三六四件、負債総額一九三四億三八〇〇万円であり、五月としては史上二度目である。前月比は一・七%増なのである。この事態に特徴的なことは、中小企業の倒産であり、負債一千万以下の中小零細企業の倒産を加えると、もはや膨大な中小未組織労働者が、何らかの形で、この不況の波をもろにかぶり、街頭にたたき出され、また劣悪な労働条件下におかれ、かつ零落化を強制されているといわなければならない。

そして、これらの労働者は、総じて労働組合すらなくその多くが無抵抗なままに放り出されているのである。こうした労働者大衆のおかれた現状について、あの労働貴族どもは何ひとつ変える気はないし、またその能力もない。

だとするならば革命的労働者の任務は鮮明であろう。いまや革命的決断と大胆さをもって、かかる大多数の労働者の前に登場し、具体的に結びつき、こうした現状を打開するための要求を組織し抜くことでなければならない。とりわけ、この活動を、今日、いまだ現状を破棄する大衆行動にひき入れられてはないにせよ、自らの困苦を打開する具体的方向を模索しはじめている組織労働者の下層、未組織労働者に向けて、彼らと具体的に結びつき、彼らの原則的諸要求をくみ上げ、共に進むことからはじめなければならない。

このようなプロレタリア・人民の全体、階級闘争の総体を見渡し闘う労働者階級の立場こそ、重要なのである。三里塚闘争一三年の苦闘は、労農学の固い団結の砦と化すことによって日本階級闘争の先進的位置にある。しかもこうした位置を、より発展させていくためには、プロレタリアートが、これまで以上に指導性を発揮し、全人民をけん引しうる力を一層たくわえなければならない。

わが同盟は、この間三里塚を闘う労働者統一実行委の建設に多大な力を注いできた。この実行委に結集する先進的労働者は、この間の三里塚三〜五月の激闘を断固として闘い抜いている。昨年の四日間戦闘を継承し、三・二六快挙、五・二〇闘争の武装した労働者階級人民の闘いを更に発展させ、しかもより広範な人民の総力決起で三里塚闘争の勝利まで闘い抜かなければならない。労働者統一実は、こうした闘いの中軸となり、日本労働者階級の先進的、模範的代表となるだろう。

すでに反対同盟と戦闘的労農学は、百日間闘争に突入した。今こそ、この闘いに決起し、東峰団結小屋を軸に二期工区戦勝利！ 空港粉砕！ の実力闘争、ゲリラ戦を一層強めなければならない。四日間戦闘で虐殺された東山薫君、三・二六戦士新山幸男君の遺志を受けつぎ空港爆砕に全力決起せよ！

＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃
＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃

廃港へ向けた「百日間闘争」へ突入

5・20 現地に二三〇〇

五月二〇日、三里塚現地には、二三〇〇の闘う労働者、農民、学生が全国各地から結集した。所沢―新宿間の地下同軸ケーブル切断、日本航空管制史上初の全面マヒという尖鋭な闘いから開始されたこの日、三里塚現地は一三〇〇の機動隊によるものものしい戒厳令下におかれたが、このピストル、ライフルまで持ち出した敵の弾圧網を突破し、集会は開始された。

その頃、空港内部では、公団―運輸省関係者のみによる「開港式典」がほそぼそと開かれていた。日帝福田の「国家的威信」をかけた「出直し開港」は、当の福田も出席できないまま、一三〇〇の雇兵に守られ、体裁をとりつくろうことのみに終始しているのだ。

反対同盟戸村委員長があいさつに立って、五・一七声明にこめられた反対同盟の団結と勝利の確信、すなわち、管制塔―横堀戦闘に恐怖する日帝福田が苦しまぎれに持ち出した〝話し合い路線〟なる甘言を断固はねのけ、完全廃港まで闘い抜くという同盟の一致団結した闘争姿勢を訴え、集会参加者全員で、これを確認した。

集会がもりあがる中で、横堀要塞戦闘を果敢に闘い、不当逮捕・勾留されながらも獄中で断固闘い抜いた同盟北原事務局長、石井実行役員が演壇に立った。

北原氏は取調検事が氏に放った「腰ヒモで首をくくれ」という暴言こそが、〝話し合い〟ポーズをとりながら、開港をゴリオシする日帝福田の本音であることを暴露し石井氏は、暴力や甘言で人民の大義を圧殺することはできない、と歯切れよく語った。そして両氏とも、共に不当逮捕された秋葉哲救対部長と管制塔―要塞戦士の一日も早い奪還を訴えた。

挨拶に立った戸村委員長,北原事務局長

新山君虐殺弾劾 6・14 反対同盟葬行なわれる

六月一四日、三里塚現地朝倉団結小屋において、六・二六管制塔占拠の偉大な闘争を先頭で担い、権力機動隊に虐殺された新山幸男君の葬儀が、反対同盟葬としてとりおこなわれた。

新山君は三・二六管制塔占拠戦のまっただ中で全身に火傷を負い、更に機動隊によるテロ、長時間の放置という殺人攻撃と闘い、以降八〇日にわたる死との闘いをつづけていたが、六月一三日ついに永眠した。二四歳であった。

同盟を代表して戸村委員長は、小川明治副委員長、大木よねさん、三ノ宮文男さん、東山薫さんにつづく新山君の烈死を悼み、「すさまじい執念につらぬかれた彼の病床での闘いを受けつぎ、権力の非道の攻撃をはねかえして人々の大義のために闘い抜きます」と表明した。

6・15 樺同志の墓前祭 行われる
アピール 樺同志に新たな前進を誓う

一九六〇年、六月一五日をわれわれは想い起こします。この日、日米安保条約改定に反対し、岸政権打倒を掲げた日本労働者階級人民は、数十万の隊列をもって国会前をうめつくしました。それは日本帝国主義のアジア再侵略の野望を真向うから拒否する日本人民の偉大な闘いでありました。

この偉大な六〇年安保闘争と共に、われわれは、若き生命をこの闘いに捧げた樺美智子同志を決して忘れてはなりません。この闘いの先頭に立った樺同志は、その献身性のゆえに、憎むべきブルジョア権力によって虐殺されたのです。

しかし、樺同志！　あなたの尊い献身的闘いは、その後の日本の労働者階級人民の道に巨大な一里塚を築きあげました。すなわち、あなたが若き生命を燃焼させた六〇年安保闘争こそは、「前衛党」として君臨していた日本共産党（宮本一派）の仮面をはぎとり、その修正主義への転落を全人民の前に明らかにしたのであり、日本階級闘争に、マルクスレーニン主義を復権する巨大な転換点を形成したのです。以後、労働者階級と学生が、樺同志の遺志を受けつぎ新たな革命党建設に向けた茨の道を力強く進みはじめたことは言うまでもありません。

日本共産党と袂別し、若き全学連の先進的学生を中心に結成された第一次共産主義者同盟は、この六〇年安保の激動の中で、日本の政治革命がプロレタリア独裁・社会主義の大道を進まねばならないことを高らかに宣言し、帝国主義の前に膝まづく日本共産党を尻目に、大衆闘争の最先頭に立ち、勇敢に闘い抜きました。この第一次共産同が訴えたマルクス・レーニン主義の復権、その理論的核心は、いまや万人が認める通り、以降の日本階級闘争の革命的発展の基礎となったのであります。

われわれは、この第一次共産主義者同盟と樺同志の革命的精神を継承して闘ってきました。しかし、われわれは、この革命的精神を労働者階級と固く結合させ、その階級利益を徹底的に守り、発展させることにおいて敗北し、いまだ革命党建設に勝利したとは言えません。われわれは、まず何よりもこの敗北を徹底して総括し、労働者階級を指導的階級として高めあげる真のマルクス・レーニン主義の革命党を建設しなければなりません。そして、共産主義運動の大分裂という今日の状況において、そのことを成し切るためには、マルクス・レーニン主義を継承・発展させ、ソ連社会帝国主義とヨーロッパ、日本の修正主義者、社会帝国主義派を批判してきた毛沢東思想の核心を正しく受け継ぎ、日本労働者階級人民の社会主義革命に向けた闘いと結びつけることが必要だと思います。

あらゆる面での自らの不充分性が、総括され、反スタ・トロツキズムを克服し、プロレタリア独裁を準備する闘いの中に、第一次共産同以来の血の教訓が生かされる時、共産主義者同盟の再生はあると確信します。

不抜の革命党建設に向けて、われわれは多くの共産主義者と団結し、革命的人士と肩を組み、勇猛果敢に闘かわなければなりません。ロシア革命以降、第三の戦争と革命の時代の到来は、いま全世界の階級的矛盾を激成させていますこうした時代の中で、プロレタリア世界革命へと突き進むため、われわれは、共産主義者同盟の再生、不抜の革命党建設を何が何でもやりとげねばなりません。

志なかばで倒れた樺同志！　そして傷つき倒れていった多くの同志たち！　われわれは、あなた、そして多くの革命的であった君たちの意志を最後まで受けつぎ、進むことをここに誓います。樺美智子同志安らかなれ！

―共産主義者同盟中央委員会

相模原の地で四年にわたり闘い抜かれてきた大和製缶・田中将治君の不当配転―解雇撤回闘争は、さる五月一二日、横浜地裁第七民事部において全面勝利の判決をかちとった。

七四年五月一一日、大和資本は田中君に対して突如内示なしの仙台工場即日転勤命令を出し、拒否されるや、翌六月一五日付をもって一方的な解雇攻撃をかけてきたこうした資本の攻撃に対して田中君は、横浜地裁に「地位保全仮処分申請」を提訴し、同時に労働者の階級的原則性を断固として堅持し、今日まで不当配転―解雇撤回闘争を不屈に闘い抜いてきたのである。

とりわけ、地域の闘う仲間によって結成された「田中君を支援する会」を中軸として、昨年一一月田中君自らの肉体をかけて闘われた四八時間ハンスト闘争を頂点とした数派に及ぶ本社闘争（東京日本橋・柳屋ビル内）、工場闘争、駅頭情宣などあらん限りの戦術を駆使した連続闘争の爆発は、地域の闘う労働者の結集をより一層促進し、更に既成の労働組合も何らかの形で取り組まざるをえない状態を生み出していった。まさしく、十一月連続闘争の爆発は、地域の戦闘的労働者の総結集によって、個別の闘いから文字通り地域総体の闘争へと発展する一大転換軸を形成したのである。

大和資本がこの闘いに恐怖し、横浜地裁の反動性を利用して、結審―判決の引きのばしをはかってきたことは言うまでもない。

昨年十一月十一日の公判において田中君と弁護士が結審を要求したにもかかわらず、裁判長は大和資本の最終準備書面の未提出（無論、意識的にサボタージュしたのだ！）を理由として、結審の延期を認めた。しかも裁判所は、翌十二月二日の結審において判決公判を本年二月二四日と決定したにもかかわらず、何の理由もなく突如五月十二日判決公判と一方的に通告してきたのである。

このような横浜地裁の資本と一体となった暴挙に対して、支援する会は、二月十九日の総決起集会

大和製缶・田中将治君へ全面勝利判決
不当配転―解雇撤回闘争の新たな発展を

を横浜地裁の判決引き延ばしに対する抗議集会に切り換え、地域の総力をあげて地裁糾弾闘争を闘うことを決定し、二四日当日、横浜地裁のある関内駅頭情宣の後、地裁に対する糾弾闘争を貫徹した。

しかし、大和資本は、会社のメンツを理由に東京高裁に対して横浜地裁判決全面破棄の仮処分申請を行なってきた。このあくなき大和資本の攻撃は、司法の反動攻勢に全てのぞみを託した悪あがきに他ならないが、原職奪還、完全勝利をめざす我々の闘いは更にその戦線を拡大し、強化し、地域の総力を結集して、この新らたな攻撃を粉砕し抜いていかねばならない。

その為に、この間の支援する会自身の闘いをその組織体制の隅々にまでわたって総括し、新らたな闘いの方向を確定していかなければならない。

とりわけ、裁判における勝利判決は職場の中において、田中君の闘いを支持するか否かを一人一人の労働者に問いかけ、更に階級的原則性を貫く労働組合をつくりあげるために、今われわれはなにをすべきかについて、鋭く迫ってくる。

昨年一一月の連続闘争の爆発の中で、すでに相模原市職労、大日本硝子労組が支援決議をあげ、また五二団体が早期判決を支持する団体署名をよせた。しかし当該大和製缶労働組合は、たとえば東京工場支部が、この間「支援する会」との話し合いを行ってきているものの、労組中央本部のしめつけの中で、田中君闘争への何らの具体策も示しえず、動揺を深めている。労組中央本部にいたっては、労使協調路線をひた走るばかりで、田中君への方針を出すどころか、結果として資本の弾圧に手を借すという始末である。われわれは勝利判決を活用し、職場にはたらく労働者を十分にひきつけることができるだろうし、その闘いの中で、こうした大和製缶労組中央本部、とりわけそこに巣食う組合官僚との闘いを開始しなければならない。

その闘にとって、これまで集められた他の労組の支援決議、署名は大和製缶をとり囲む地域の労働者の関心と闘いを示すものとして有効な武器である。

こうした意味において支援戦線の拡大は、個別の闘いの発展をうながす地域の広範な闘いとして、一つ一つの職場、労働組合を決起させ、ひいては階級的労働運動を構築していくための重要な闘いの一つである。そこにおいて既成労働運動指導部との闘いもまた更に激しくなるであろう。

われわれは、支援戦線の更なる強化拡大を通して、地域における闘いを一層活性化させ、田中君闘争の完全勝利、そして既成労働組合指導部との対決を強める中で、階級的労働運動の構築をかちとっていかねばならない。

本山闘争 5・28～29
仙台現地闘争に全国から四〇〇

五月二八、二九日、仙台現地において、全金本山支部と全国の支援労働者が結集し、本山現地闘争が闘われた。

現地闘争はまず二八日、労働福社会館で、支援の労働者二〇〇余人を結集して決起集会がひらかれた。集会は、支部抜き中労委和解反対、五項目前提、八・二襲撃糾弾、闘う自立体制・財政確立を掲げて、闘いの天王山にふさわしい参加者の熱気の中で委員長あいさつ、書記長の基調報告で始まった。

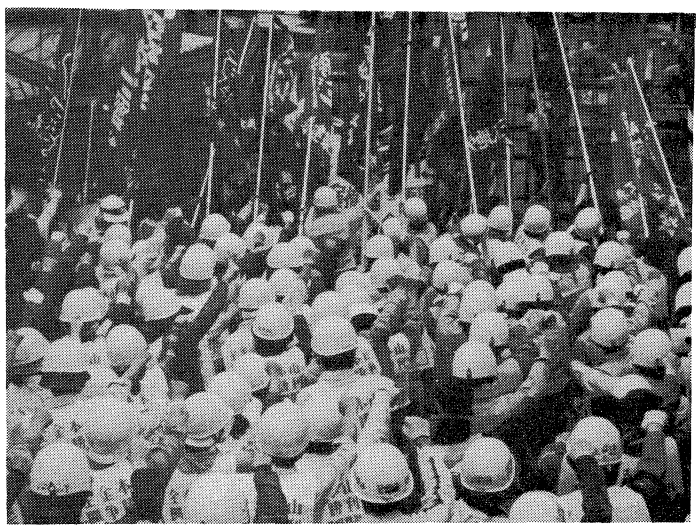
「八年にわたる闘いの中で着実に資本を追いつめてきている。大衡村移転計画も、第二期計画分が今年度予算に計上できない状態で合理化も頓座している。今春闘において二組は、資本から六〇〇〇円の賃上げを　ひき出すにとどまり、年令給の廃止をうけざるをえない状態で、二組組合員の間には敗北感が広がっている。中労委も支部抜き交渉を延期せざるをえない事態となっている。われわれ支部は、全組合員アルバイト体制を組む中で自主財政の確立に向けガンバッている。昨年八・一テロの謝罪、五項目前提を受け入れない限り、中労委和解には応じない。自立した闘争体制を維持し断固闘い抜く」趣旨の発言に、全員が圧倒的拍手で応えた。

つづいて支部を支援する労働者の代表があいさつに立ち、三里塚ジェット闘争を闘う動労千葉の労働者は、「階級的労働運動を担うものとして最後まで闘い抜く」と発言し、女川原発反対同盟の代表者は「これまで農民は農民の運動、労働者は労働運動、漁民は漁民の運動と分断されてきたが、現在はそれぞれの壁を突破し、共同した闘いがつくられてきている。私たち女川の漁民も本山の闘いに連帯して闘う」とアピールし、大きな拍手をよんだ。

更に支部の各行動隊の決意表明があり、本山闘争完全勝利に向け決意を固めた。最後に翌二九日の門前闘争、大衡村工場移転阻止、社長宅抗議闘争、富士銀抗議闘争の方針提起があり、シュプレヒコールで集会を終えた。

二九日は早朝から、北仙台駅前に四〇〇の部隊で結集し、本山作作所前に登場し、果敢な門前闘争をくりひろげたのである。

その後の仙台市内デモにおいては警察権力は資本の意をくみ、支部支援の強固なスクラムに、機動隊私服の弾圧を加えてきたが、断固としてこれを粉砕し、市内デモを勝利的に貫徹した。

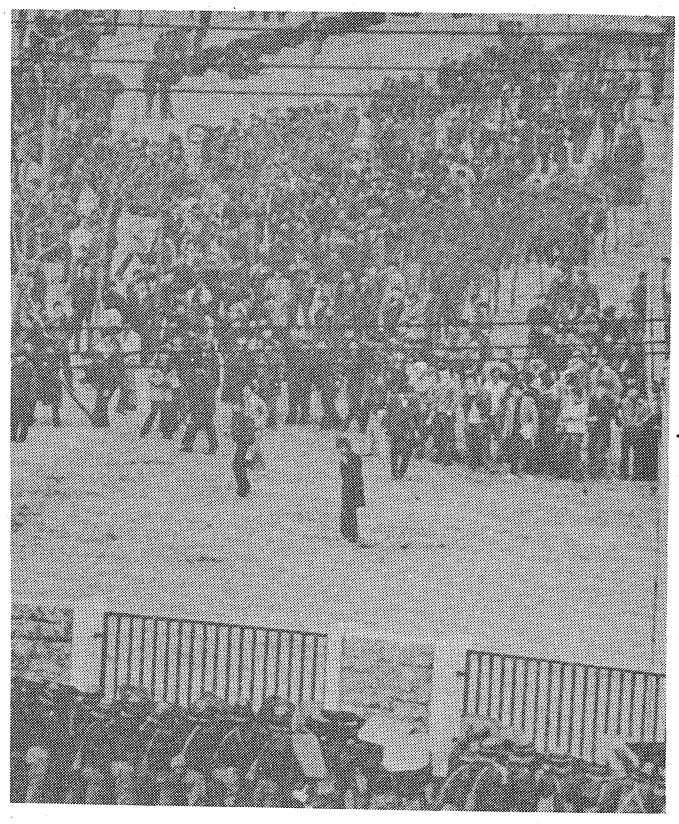


本山資本を圧倒する全国の労働者

南朝鮮階級闘争の激化と新たな転換軸　その1

日帝・朴独裁による人民収奪と朝鮮労働者階級人民の新たな決起

朝鮮侵略反革命を国内戦に転化せよ」の闘いを朝鮮問題について反動的敵対、ないしは無力性をさらけ出した反スタ派、トロツキー教条派を根底的に批判し抜き、更に大胆に、そして最も基軸的な闘いとしておし進めていかなければならない。



南朝鮮人民の決起を断固支持せよ！

三里塚決戦を頂点とした階級情勢の内乱的成熟、革命情勢の端初的接近の中で、日帝の朝鮮侵略反革命粉砕・朝鮮人民決起連帯の闘いは、日本プロレタリアートにとって、最も重要かつ不可欠の任務、日本革命の根本を定める闘いとして位置している。

とりわけ、我々は昨秋一〇・一四「反帝・反社帝・反覇権人民集会」の地歩をうけ、マルクス・レーニン主義の今日的復権・反スタ・トロツキズムの止揚、毛沢東思想の評価を基軸に、急進民主々義の克服、「共産主義と労働運動」の結合、中央集権非合法党建設としてわがものにしつつある。我々は更に、この課題をプロレタリア国際主義に徹頭徹尾うちぬかれたものとして発展させていかねばならない。一九二〇年代前半、相次ぐヨーロッパ革命の後退の中で、「共産主義における左翼小児病」、コミンテルン二回大会、三回テーゼなどを通してレーニンが提起したヨーロッパにおける本格的革命党建設の問題が、他方では、「帝国主義論」さらに二回大会「民植テーゼ原案」と同時一体のものとしてあったことに、我々は注目し、わがものとせねばならないのである。

今日、朝鮮人民の南北自主統一の闘い、北部におけるプロ独を堅持した社会主義建設、南部における反朴・反日・民主の闘いの前進、そして他方において、日本帝国主義がこの朝鮮人民の闘いに真向うから敵対し、自らの政治的・経済的危機の深まりの中で、朝鮮侵略反革命にその体制的延命を賭している時、我々は「日帝の朝鮮侵略反革命を国内戦に転化せよ」の闘いを通じ批判の意思を示す、ことを行動方針としてよびかけた。

九日には梨花（イーファ）女子大で八〇〇人の学生が「維新体制下での各種選挙ボイコット」「逮捕学生の釈放」を叫び学内デモを敢行、また要求の貫徹まで黒スカートと白ブラウスを着て抗議の意思を示すことを決議した。

朴政権の永久化、南北分断固定化をはかる完全な翼賛組織である統一主体国民会議に対し、このソウル大、梨花大での決起をはじめ全国でこの「選挙」に反対する闘いがおこり、一八日の「選挙」に際しては、ソウルで五十余人の民主的人士が「今日のわれらの主張」を発表「この選挙は単純な一人統治の〝選挙ゴッコ〟であり、根本的に無効である」ことを宣言し、投票通知票に火をつけ燃やした。

相次ぐ朝鮮人民の不屈の決起、この間の朴東宣問題をはじめとした、米帝と、日帝―朴とのあつれき、昨年だけでも一〇人にのぼる高官の海外亡命を示されるように今日崩壊的危機にさらされた朴は、それゆえ五月一八日統一主体国民会議、一一月二六日までの大統領選挙を通して「維新体制」の血みどろの強化に奔走している。

しかし、この朴独裁を根底からゆるがす労働者・農民の闘いが、学生、民主的人士の闘いと含む闘いに対し、KCIAが中心となって大弾圧を加えた。これに対し、平和市場の労働者数百人は九月八日から李オモニと労働教室の奪還に向けた闘争に入り、九日には、「我々はいかなる妥協ものぞまない。生き残るためには死を賭して闘う」という「決死宣言」を発し、機動隊と激突、更に抗議自殺という凄絶な闘いを展開した。以後一一月一日には「平和市場労働者人権問題協議会」が尹潽善（ユンボソン）池学淳（チハクソン）咸錫憲（ハンソクホン）氏らによって結成され、一二月三日は「韓国労働者人権憲章」が発せられた。

朴独裁御用労組と対決する女子労働者の闘い

また邦林（パムリン）紡績では、繊維産業に多い、不払い強制残業に対し、七七年三月女子労働者二五〇人が、一四項目の陳情を出し、実力闘争を貫徹した。この闘いは、特に韓国労総下の御用組合が沈黙、あるいは敵対する中で、最も低賃金、劣悪な労働条件にいる女子労働者が独自の闘いを組織したこと、更に日本資本との闘いであることに注目する必要がある。一月一六日付の孔徳貴（コントツキ）女史の日本女性に訴える手紙は、この点について次のように述べている。「たとえ株式の持ち主が在日僑胞だとしても、かれらの経済的地盤が日本資本主義圏に属しているなら、これは明らかに日本の財産であると思います」そして「邦林紡績の富は、みな韓国女性勤労者たちの血と汗を奪ったものであるから、この富の所得再分配のため、日本の女性たちは日本で決起して闘え」と述べている。

現在、最も激しい闘いを続けているのが東一（トン・イル）紡績の労働者である。東一紡績仁川工場の闘争は、高給で二〇〇人の男子を排して、一〇〇〇人を占める女子労働者から労働組合の支部長を出し、要求を代弁する組合をつくろうとする闘いである。この闘いに対し、会社、韓国労総、繊維労組は、暴力団をひきこみ、三月三一日の選挙当日、投票にむかう女子労働者に対し、糞尿をあびせ、顔になすりつけ、口におしこみ、また殴打したのである。更に会社はハンストを闘い抜いた女子労働者一〇八人全員を解雇した。これに対し、カトリック教会をはじめ、学生、民主的人士が続々と女子労働者支援の声をあげ、大きな闘いとなっている。

この三つの闘いに象徴される南朝鮮労働者の闘いに対し、我々は次のことを押さえておかなければならない。

第一に「いま、われわれは全国六百万の労働者兄弟姉妹に、われわれ労働者があらゆる力をつくして鉄のごとく団結し、抑圧政治と特権経済の廃絶のための闘争に決起することを強く訴えながら、ここに『韓国労働者人権憲章』を発表する」（七七年一二月三日）に示されるように、賃あげ、未払賃金の支払い、労働条件の改善などの経済的要求とともに、労働三権の獲得、「国家保衛法」撤廃などの政治闘争としての性格を有していることである。

第二に、今日の決起が、「十月維新体制」の忠実な支柱となった韓国労働組合総連盟に対し、低賃金構造の中の若年女子労働者を中心に、これと対決し、独自の団結を強め、KCIA、会社、御用組合、暴力団との実力対峙を強めていることである。たとえば、今年に入っても、朴の定めた官製記念日である「労働節」にあたる三月一〇日「これ以上だまって働くことを期待するな、われわれは動物でもなく機械でもない」とする「七八労働者人権宣言」が発せられ、また約八〇〇〇人を集めた韓国労総の官制式典において、数十人の女工が、果敢に、式の途中、御用幹部を断固として糾弾したのである。いわゆる「韓国」の「高度成長」なるものが、実は輸出中心の労働集約型産業の徹底した低賃金によっていること、とりわけ、物価の値あがり、賃金格差の拡がり（大卒で一二万七千ウォンところが中卒女子では二万八千ウォン）の中で、こうした低賃金構造そのものから生まれ、これを粉砕する闘いが開始されたのである。

第三に、先に述べた邦林紡績をはじめ、「日本企業は出て行け」と叫んだ東洋石材労働者の闘い（七七年七月三〇日）など、日帝の新植民地主義収奪に対する闘い、反外資闘争の高まりである。

農民の闘いと民主人士の結合

こうした労働者階級の闘いの前進と共に、全国一二〇〇万といられる農民の闘いも、今新らたな転回―前進を開始しようとしている。

四月二四日、全羅南道光州市のカトリック教会で、全国から五〇〇余人の農民が結集し、「農民のための祈とう会」を開き、「政府は農民収奪をやめよ」とする声明文を発したことが伝えられている。昨年来、米の買い上げや、農協の不当な収奪に抗議する闘いが散発的にくり拡げられたが、朴の「セマウル運動」による農民への抑圧、収奪に対し、大きな反撃が開始されようとしている。「韓国」のいわゆる「工業化」政策は、農村の疲へいを招いた。とくに低賃金労働力を支えるものとして米価、農産物価格はきわめて低く押さえられ、その結果、一九六八年を前後して「韓国」は大きな食糧不足をむかえたのである。このような中で開始された朴の「セマウル運動」とは、封建的な土地所有関係を温存し、大多数の農民を零細農・小作農へと転落させながら、「自助自立の精神による農村の環境改善による農村の近代化」の名の下に、農民を農村につなぎとめ、安い労働力としてプールすることをねらったものである。とくに、大地主や富農の牛耳る農協を通して、農民を支配し、収奪した。農民のうち小作農は、全体の三〇%で、そのうちの八〇%近くが生産物の五〇%を小作料としてとられ、また農協からは高い値段で資材を売りつけられ、米をはじめとした農産物は買いたたかれている。

これに対し、四・二四集会に示されるように農民も反セマウルの闘いを開始したのである。

このように、現在、南朝鮮では、伝統的な学生、民主的人士の闘いとともに、労働者、農民の階級深部からの闘いがまきおこっているのである。この闘いは明確に、日帝の朝鮮侵略反革命、新植民地主義収奪と、それに内接した朴の「高度成長」そのものを、根本から粉砕する闘いであり、南朝鮮における広範な民主化闘争の最も基軸的な部隊である。

日帝の朝鮮新植民地化攻撃の性格

こうした南朝鮮労農人民の闘いの前進に対し、日帝は朴とともに最大の危機感をもち、これへの全面的な敵対、更に一層の侵略反革命―新植民地主義収奪を強めている。いうまでもなく、日帝の侵略反革命体制をつきやぶり、侵略反革命のおこぼれにあずかっている社帝派―社会排外主義者どもを粉砕する闘いは、日本プロレタリアートにとって、日本革命にとって、最も根本的な問題である。

先進的学生の決起と「民主学生宣言」

五月八日、それまで沈黙を守っていたソウル大学の学生一五〇〇名が「民主学生宣言」を発して決起、機動隊との対峙戦を闘い抜いた。とくに、目前に「選挙」の迫った統一主体国民会議について「六年間で、ただの一度も民族の課題である南北統一に積極的役割を果たさず、独裁政権維持の役割を積極的に果たしてきた」と批判し、更に①総代選挙に反対し、一九日から一週間の同盟休校、②解雇された東一紡績労働者のための支援募金、③ビラ、替え歌、落書をともに大きな前進をとげていることに、注目しなければならない。

三月一〇日の歴史的な「労働者人権宣言」の発表を突破口として、一九七七年は、南朝鮮における労働運動の戦闘的再生を告げる年であった。

その最も中心となったのはソウル市清渓川（チョンゲチョン）にある平和市場の労働者である。二〇〇〇軒の商店、八〇〇の作業場に二〇〇〇余の労働者が働き、「韓国」国内需要の七五～八〇%の被服繊維をここではつくっているが、作業場の労働条件の劣悪さ、一二～一四時間の長時間労働、低賃金と、「韓国」における搾取の最も典型とも言えるところである。

七月二日の皮革労働者関鍾鎭（ミンチョンチン）氏の労災による死に抗議した李小仙（イソソン）女史を先頭とする「国家保衛法」撤廃を

日「韓」大陸棚協定の植民地主義的本質

第一に、日帝の南朝鮮への経済侵略を徹底的に粉砕しなければならない。

六五年日「韓」条約の締結をもって全面的に開始された日帝の対「韓」投資は、中小企業による労働力集約型産業への投資、商業借款中心から、七〇年を契機に、直接投資、大財閥主体へと転換していく。その大きな転換点は七〇年四月の日「韓」協力委員会第二回総会の「矢次構想」である。すなわち、単なる商品経済圏から、「アジア版EC」と称して「韓国」を日帝の産業構造の下に組込むものであり、浦項製鉄所、ソウル―釜山高速道路、関釜フェリー、馬山輸出加工区の設定として実現されたのである。

さらに七三年を契機として、朴は重化学工業化計画と「韓国」軍近代化＝自主国防計画を発表し、日帝は、これを全面的にテコ入れしていった。いわゆるKIDC構想が表向き撤回されて以後今日、日帝は「韓国」第四次経済開発五ケ年計画（一九七七～八一）―戦力増強五ケ年計画への四〇億ドルの投資を表明している。日帝は、新植民地主義的収奪のより一層の構造的強化とともに、実質的に兵器を供与することをもって朴を軍事的にも支え、更に日帝国内の過剰資本を兵器産業へふりむけようとしているのである。そして我々が忘れてはならないことは、この朴の自主国防計画が、「韓国」の自主核開発―核武装化と結びついていることである。

更に日帝は、六月中旬にも日「韓」大陸棚協定関連法案を強行採決し、領土拡張―資源収奪の野望と朴へのテコ入れを強めようとしている。この日「韓」大陸棚協定は、その約五分の一が中国の経済水域（二〇〇カイリ）を浸食して線引きをするという許すことのできないものである。同時に共同開発という名をとった「韓国」の経済水域の日帝への組込みであり、日「韓」併合の野望の新たな開始である。そもそもこの海域に石油が出る可能性は皆無といわれ、にもかかわらず協定締結後九ケ月以内に、日本の石油開発公社が五〇〇〇億円の金が探索資金として融資され、以後五〇年間にわたり数十兆円の資金が出るという、すさまじい協定である。すなわちソウル地下鉄疑獄の暴露などの中で、今度は国家レベルで、公然と朴にワイロをおくろうとするものである。この背景にあるものは、米帝と日帝との帝国主義的矛盾の激化であり、こうした中で、日帝はなりふりかまわず、日帝―朴体制を強化しようとしているのである。

更に我々は、昨年一一月七日、「韓国」産業銀行と山一、野村、日興、日長信の出資によって、ソウルに設立された「セハン相互金融株式会社」について注目する必要がある。これは、七九年一月より、「韓国」産業銀行が円立て外債一五〇億円を日ノ　売り出すことを大蔵省が認可することとバーターでなされたものである。日本の金融機関が、直接、「韓国」内に投資しうるようになるものであり、日帝が「韓国」の経済構造のポイントを完全におさえこむ―構造化することを意味するのである。

以上述べた第四次五ケ年計画への四〇億ドルの投資、日「韓」大陸棚協定、セハン相互金融株式会社をテコとした日帝の対「韓」侵略は、明確に、南朝鮮人民からの収奪を強め、反朴、反日の闘いへの大弾圧をもってのみ可能となるのである。

米日「韓」反革命臨戦体制と釣魚台略奪攻撃

第二に、「チームスピリット七八」をはじめとした米日「韓」反革命臨戦体制、さらに日帝の独自の軍事体制の強化である。

三月七日から一六日まで十日にわたり「チームスピリット七八」とよばれる米「韓」合同軍事演習が行われた。この演習は、一一万八〇〇〇人という朝鮮戦争以来最大規模の軍事演習であり、とりわけ北部共和国への軍事侵略を公然と指示し、朝鮮全土の焦土化をもくろむものであった。この軍事演習は、米海―空の機動部隊による有事即応態勢を基軸として、日帝―自衛隊による作戦支援、「韓国」軍の「自主的強化」による防衛分担を背景とした米日「韓」反革命臨戦態勢と結びつきつつ、相対的に独自な軍事体制の確立を画策している。公海上の防空、防海圏の拡大、P3C、F15の導入、小笠原諸島への空陸海三軍の基地建設要求をはじめ、四国、九州など西南方面への自衛隊の集中配備、混成団＝海兵隊の設立、北海道での冬期訓練の強化―朝鮮半島山間部を想定、日「韓」議員安保協の発足、八一年中央指揮所の正式発足を通して、日帝は本格的な朝鮮出兵態勢の確立を急いでいるのである。

第四に、この間の釣魚台、独島問題を通じた領土拡張の排外主義キャンペーンの大々的な組織化による、侵略反革命（戦争）体制への突入である。

四月一二日、中国漁船団の釣魚台（ティヤオユイタイ）周辺海域への出現と同時に、日帝は海上保安庁の巡視船、沖縄からP2J対潜哨戒機をはじめとした自衛隊が急派し、また国内において大々的な「尖閣列島を守れ」「断固たる処置をとれ」なる排外主義キャンペーンが、自民党、右翼を中心にまきおこした。

いうまでもなく釣魚台は、中国固有の領土である。第二次帝国主義戦争において中国人民の闘いの前に敗北した日帝は、カイロ宣言、ポツダム宣言において、日帝が強奪した中国人民の領土をすべて中華民国（当時）に返還することを約束した。今日、日帝が釣魚台問題において持ち出している論拠は、一八九五年の下関条約（日清戦争後の戦争処理、その結果、台湾および澎湖諸島を強奪）より三ケ月前に清から譲渡されたものだから、カイロ宣言は適用されないというふざけきったものである。釣魚台は明確に、当時の天皇制軍事官僚独裁が、清から戦争によって暴力的に奪いとり、占領したものであり、逆にこのことによって、はじめて日本の支配権が「確立」したものである。釣魚台は、地理的にいっても沖縄諸島との間に深い海溝が存在し、中国大陸の大陸棚にあり、中国人民が漁の際、使用していたものである。にもかかわらず、日帝は、かつての天皇制軍事官僚独裁の軍事的強奪を美化し、再び大々的な領土拡張と、排外主義キャンペーンを開始し、侵略反革命戦争体制へと人民を駆りたてようとしているのである。

次号につづく

徐俊植氏の再拘束弾劾！

韓国人「政治犯」の即時釈放を実現しよう

五月二七日、七年の刑期を満了した在日朝鮮人「政治犯」徐俊植（ソ・チュンシク）氏に対し、朴は「社会安全法」による「保安監護処分」を適用し、早朝全州（チョンジュ）矯導所から大田（テジュン）矯導所に再収監した。われわれは、この大暴挙に対し満腔の怒りをもって糾弾するものである。

徐俊植氏は、兄の徐勝（ソ・スン）氏と共に七一年、朴三選阻止の闘いが盛りあがっている中で、四月二〇日、突如「学園浸透スパイ団事件」の首謀者として逮捕が発表され、兄の徐勝氏は無期懲役、俊植氏は懲役七年が下された。この間、死寸前の激しい拷問をはねかえし、「私は転向しなかった。なぜなら私と兄だけの問題ではなく、これは全体の問題だからです。……私には共産主義に対する確信があります。未来に対する展望があります」と述べ不屈の闘いをつづけてきた。この闘いに心底恐怖した朴は、「社会安全法」により、明確に獄死攻撃をかけてきたのだ。

この「社会安全法」は、七五年ベトナム、カンボジア、ラオスの民族解放闘争の勝利により危機を迎えた朴が、七月「民防基本法」「防衛税」などと共に戦時四法のひとつとして制定したもので、「特定犯罪を再犯する危険性を予防し、社会復帰のための教育改善が必要であると認められる者に対して保安処分を行う」ことを目的とし、その対象者は三〇万人ともいわれている。保安処分には、①日常的な監視（保護観察処分）②住居地の制限（住居制限処分）③一定の収容所に監禁（保安監護処分）の三段階があり、徐氏には、最も重い保安監護処分が適用された。

すでに多くの「韓国」内の「政治犯」が「社会安全法」によって再収監―獄死攻撃にさらされているが、在日朝鮮人「政治犯」としては、はじめての適用であり、今後六〇名をこす在日朝鮮人「政治犯」に続々適用される可能性もある。

今日、朴軍事官僚独裁は、「高度成長」―「漢江の奇蹟」なるキャンペーンをもって、あたかも「韓国」が福祉国家へ転じていくような幻想をふりまいている。しかし軍部とテクノクラート層の暗闘、日帝・米帝の争闘、そして何よりも、「高度成長」の産物ともいえる労働者・農民の新たな戦闘的運動の開始は、朴軍事官僚独裁を崩壊的危機へとたたきこんでいる。まさにだからこそ、「民族全体を考え、共産主義に確信をもち、未来に展望をもつ」徐氏のこうした思想そのものに最大の恐怖をもち、抹殺をたくらむのである。更に日帝は、「椎名メモ体制」ともいうべき中で、KCIA―日本警察―勝共連合を軸として、在日朝鮮人民の闘いの抹殺に全力を尽しているのである。

われわれは、反日・反朴・民主・統一の朝鮮人民の闘いに対する国際主義的連帯の内実をかけ、この徐氏への「社会安全法」適用弾劾、さらに六名の死刑確定者をはじめとした全在日韓国人「政治犯」即時釈放の闘いを、あらゆる職場、学園、地域の中に訴えていかねばならない。

東峰だより

東峰団結小屋

電話（〇四七六）三二―〇五〇五

5月12日　成田治安立法成立。三里塚闘争圧殺のための治安立法を粉砕し、反対同盟との団結をより一層打ち固め、開港阻止！　完全廃港へ。反対同盟、緊急声明を発し「先日の福永親書は、われわれ農民に対する最後通告にほかならない。反対同盟は、一切の制約を取り払い開港阻止のため死力を尽して闘う」との決意を表明した。

5月16日　岩山団結小屋、木の根団結砦に対して、運輸省、使用禁止命令を発す。この日、早朝より反対同盟、支援が両団結小屋に続々と結集し、この攻撃に対して断固として闘い抜いた。運輸省、一歩も近づけず。

この日の早朝、権力千葉県警は、反対同盟青年行動隊石井新二氏を不当にも逮捕する。五・二〇を前にして予防検束攻撃が激化している。弾劾し、早期救対部長の早期奪還を。

5月17日　北原事務局長、石井武実行役員奪還。秋葉救対部長に対しては、不当にも保釈却下。二名の同志を奪い返し、意気高い反対同盟。と同時に、秋葉救対部長の早期奪還を。

反対同盟、一切の話し合いを拒否し、あらゆる弾圧を粉砕して、開港阻止決戦に死力をつくす、との声明を発する。

5月20日　第一公園に、反対同盟、全国の労農学、二〇〇〇人が結集し、午前一〇時、開港阻止全国総決起集会がかちとられる。空港周辺は、夜中まで、日帝―公団の開港強行に対する怒りの炎で焼き尽されん。

5月21日　早朝より、岩山、木の根において、反対同盟、支援の結集メモと一番機阻止闘争かちとられる。

5月27日　秋葉救対部長奪還。

6月3日　反対同盟、百日間闘争を決定。長期戦を断固として闘い抜き、完全廃港へと攻めのぼる反対同盟の決意を明らかにする。反対同盟の決意に応え、空港爆砕に向け、ありとあらゆる手段で闘い抜け！

東峰部落反対同盟声明

開拓の鍬入れから二十余年、私ども東峰部落民は、松林、竹林を見違えるような農地に作り変え、来る日も来る日も土に向い、むしろの上で寝食をし、貧しさを克服し、冷害や日照りと闘い、国民の食糧を生産すべく、己の体にむちうって、この生業に誇りをもって生きてきました。

空港絶対反対の決起と、十三年にわたる反対闘争は、戦後開拓農民の私どもを支えてきた価値観に照し合わせて、人間として当然の行為であり、歴史をきりひらく使命ある闘いと確信するに至っております。

政府・空港公団の十三年間にわたる行為は、人類の歴史に逆行する暴挙であり、たとえ廃港にしても、あがなうことのできない大罪を、すでに犯しています。

三月二六日の人民の勝利がなければ、福田政府は、「話し合い」の姿勢すらなしに、農民つぶしの道を突き進んで行ったでしょう。

しかしながら「話し合い」がまがいものであることは、反対同盟三幹部をはじめ多くの同志に対する政治監禁、成田治安立法の上程によって明白です。

私どもが一歩下がることは、百歩も千歩も下がることに等しく、彼らが千歩も万歩も下がったとしても、私どもには一歩にも見えないでありましょう。私どもはそれほど真剣にこの闘いに生きてきました。

一体いかなる事態になれば、政府・空港公団は、自ら犯した大罪に気付くのでしょうか。自ら気付く知恵をもたぬ者であれば、私どもはあくまで、わが農地を友として、万余の良心を同志として、徹底抗戦あるのみです。

とんび鍬で、ひと鍬、ひと鍬掘りおこし、いつくしみ育てあげた農地を、村を、一握りの者たちの権力と富と欲望の為に一掃しようとする、私どもにとって「暴力主義的破壊活動を行う者」とは、成田活安立法によって、あくまで開港しようとする政府・空港公団以外の何者でもありません。

裁判にかけることもなく、運輸大臣の裁量によって強権的に、鉄塔、団結小屋、砦等の破壊をねらうこの新法は、成田空港の安全確保の為という枠にとどまらず、政府の政策に反対することは許さないという戒厳令にほかなりません。

私ども東峰反対同盟は、「話し合い」がらみ、「新立法」がらみ、超弾圧がらみ、札束がらみ、機動隊がらみと、幾重にもあの手この手とくり出しながら、なにがなんでも開港しようとする福田政府の開港策動を見極め、同盟に対する分断攻撃をはねかえし、決意を新たに開港を阻む所存です。

かつて二期工区内買収地の黒土をブルドーザーで押し、公団の盛った数多くの塚には、歳月とともに木々が茂り、除草剤をまきちらした大地には、やがて雑草が芽を出します。踏まれても、痛めつけられても立ちあがる農民のしたたかさは、五十日にもおよぶ獄中生活をものともしない、北原さん、秋葉さん、石井さんの笑いのなかにあります。

私どもに対する攻撃が強さを増せば増すほど、一人一人の農民をつなぐ団結の質は、労農学の連帯は、練りに練られ、新しい絆を産みだします。

私ども東峰反対同盟は、力を合わせて農にいそしみ、力を合わせて戦にいどみ、闘う一人一人の心を尊重しあい、支えあい、憶することなく闘いつづけます。

東峰共同墓地に埋まる大木よね婆さんの遺体とともに、一坪たりとも、一握りの土たりとも渡さず、治安立法をはねかえし、全同盟、全支援の人々とともに、最後の勝利まで闘い抜きます。共に闘い抜きましょう。

一九七八年五月一二日　東峰部落反対同盟

学習欄

レーニンは、コミンテルン（第三インターナショナル）第二回大会（一九二〇年七月―八月）に向け、大会出席代議員に対して一冊の小冊子を配布した。この小冊子が「共産主義における『左翼』小児病」である。この著作の基本的観点は、コミンテルン第二回大会における主要な討議となり、二回大会テーゼ等に発展されていく内容であった。

レーニンの第三インターナショナル建設

レーニンは、第一次帝国主義間戦争を通じて、徹頭徹尾、帝国主義の社会的支柱として成長転化した第二インターとの対決を組織し抜き、その社会排外主義の性格を暴露し、新たなインターナショナル建設に全力を集中した。ロシア革命の勝利（一九一七年十月）以後、一九一八年一月に、ボルシェビキは、世界の革命派勢力の代表者会議を招集し、翌一九年三月にモスクワで第三インター創立大会の開催を闘い取っていった。これらの闘いは、一九〇七年第二インター・シュトゥットガルト大会における〝左派会議〟の招集から、第二インター内における公然たる党派闘争の組織化に着手し、帝国主義戦争の真只中に「国際社会主義会議」を開催した。開催地の地名をとって「ツィンメルワルド左派」と呼ばれるこの会議の革命的少数派を指導したレーニン・ボルシェビキは、「帝国主義との闘いは、それが日和見主義に対する闘争と不可分に結びついていないならば空文句にすぎない。」と喝破したレーニンの帝国主義批判を通したマルクス主義の革命的復権をもって、文字通り、国際的党派闘争を勝利的に貫徹したのである。

「第一インターナショナルは、社会主義のためのプロレタリアートの国際的闘争の土台をすえた。第二インターナショナルは、運動が多くの国で、広範に大衆的になる地盤を準備した時代であった。第三インターナショナルは、第二インターナショナルの活動の成果を摂取し、その日和見主義的・社会排外主義的・ブルジョア的・小ブルジョア的な汚点をとりのぞき、プロレタリアートの独裁を実現しはじめた」（レーニン『第三インターとその歴史上の地位』）

戦後革命の激動の時代における第三インター建設は、全世界の闘うプロレタリアート人民の〝旗印〟となった。ドイツ、ハンガリー、ポーランドを先頭に、各国に次々と共産党が結成され、アジアにおいても一九年の朝鮮での「三・一蜂起」、中国での「五・四運動」が生まれ、一九二一年中国共産党、二二年日本共産党がそれぞれ結成された。

だがしかし、第二インターとの闘い、社会排外主義潮流との闘いが、逆に「左翼的空理空論」を生み出した。レーニンは、この傾向について「右翼的空理空論（すなわち社会排外主義とカウツキー主義）の誤りにくらべると、千分の一も危険でなく重大でもない」（「共産主義における『左翼』小児病」―以下断りのない限り、本書からの引用）としながらも、この「左翼共産主義が全く若くて、やっと生まれたばかりの潮流」であるからこそ、「最大のエネルギーを注いで、その治療にとりかからねばならない」ことを主張したのであった。

戦術思想と「左翼」主義

今、我々は「共産主義における『左翼』小児病」に反スタトロツキズムの批判、急進民主主義の正しい清算という課題を、マルクスレーニン主義の修正主義に対する首尾一貫した批判としてかちとらなければならない。そして、それは綱領問題―党建設と一体のものとしての戦術思想へと貫かれ、具体的かつ実践的に物質化され、適用されなければならない。

「我々が論じているのは、いまもって眠っているプロレタリア大衆を目ざめさせ運動に立ちあがらせ、かれら全体を革命の真近に導くきっかけについてである」「革命を実現するものは、人間のあらゆる能力がとくに高まり、緊張するときに、最も激しい階級闘争にかき立てられた何千万人の意識、意志、情熱、想像」である。だからこそ、革命的階級は、第一に「社会活動のあらゆる形態ないし、あらゆる方面に通じていなければならない。第二に、革命的な階級は、一つの形態がどんなに急激に、また不意に他の形態にとってかわっても、それに応じられるようでなければならない」のである。

レーニンはこの観点を戦術問題にとどめることなく革命家の基本的態度、任務の問題として、極めて逆説的に語っている。すなわち「直接的な、公然たる、真に大衆的な闘争が起きる条件がまだない時に、革命家であること、革命的でなくむしろ多くの場合まったく反動的機関のなかで、革命的でない環境のなかで、革命的な活動方法が必要であることをすぐには理解できない大衆のなかで、革命の利益を（宣伝により、煽動により、組織によって）守ることの方がはるかにむづかしい。―またはるかに尊い」。

我々が今日、このレーニンの著作から学ぶものは、プロレタリアートの階級的利益を真に代表する巨大な革命党建設に勝利するため、綱領問題へとしぼり込まれる党建設―階級基礎に貫かれねばならないものは何かである。すなわちプロレタリアートにとっての組織問題と戦術思想である。

小ブル急進主義とプロ独の否定

前節において「第十章 二、三の結論」部分からの引用を中心に、本書の基本的観点を明らかにしてきた。レーニンは第一章において、この点を「どのような意味でロシア革命の国際的意義を語ることが、さるのが目につく。」

すなわち組織に対する民主主義的理解（それも小ブル的な）と、指導に対する啓蒙主義的解釈を自己暴露しており、ブルジョアジーに対する徹底した党派性、すなわち資本主義批判と、そのためのプロレタリアートの団結（中央集権主義と規律）を否定した小ブルジョア的分散性、動揺以外の何ものでもない。これでは、口先だけ、言葉だけでプロレタリアートの階級的独裁を「認めた」にすぎず、「ブルジョアジーのためにプロレタリアートを完全に武装解除するのと同じである」。問題は、その党がいかなる階級の利害を代表しているのか否かだけであって、その意味で、唯物史観―資本主義批判としての党―階級問題以外ないのである。だからこそ、プロレタリア革命党としての〝条件〟を、革命に対する献身性や、政治指導の正しさとならべて「きわめて広範な勤労大衆、何よりもまずプロレタリア的勤労大衆と、さらにまた非プロレタリア的勤労大衆とも結びつき、接近し、必要とあらばある程度まで彼らととけあう能力」をあげているのである。

次いでレーニンは、いくつかの例―それは、ボルシェビキの党内闘争の総括と教訓でもある―をとり出して具体的論証に入っている。

まず、反動的な「議会」及び「労働組合」に参加すべきか否かの論争である。

前者の問題に関しては、本書の追加・四で述べられているように「ブルジョア的議会に対する真に革命的な共産主義的な利用」が問われており、「議会ボイコット」一般が正しいのではない。ドイツ「左翼」共産主義者の「歴史的にも政治的にも寿命のつきた議会主義という闘争形態に逆もどりすることは、すべて断固としてしりぞけねばならない」という「空文句」を批判し、我々がサークルではなく「階級の党」であるならば、我々にとって寿命のつきたものでも、それを階級にとって寿命のつきたものととり違えてはならない。

「労働者階級を「教育し、訓練する」ためにこそ、議会の革命的利用を学ばねばならぬ。だからこそ、レーニン・ボルシェビキによる一九〇五年のボイコット戦術も一九〇八年の議会参加も、「合法的闘争形態と非合法的闘争形態とを組み合わせる義務を守る」観点から、具体的かつ客観点な情勢を正しく分析した戦術判断に他ならないのである。

後者に関して、ドイツの「左派」の誤まりは決定的になっている。要するに彼らは、反動的な労働組合に反対し、「大言壮語」し、それらに「労働者同盟」（これこそ党と階級の混同である！）を対置し、「労働組合を脱退せよ！」と叫んでいるにすぎない。「労働貴族」をはじめとする日和見主義的、社会排外主義的指導部と闘うのは、我々が労働者大衆を代表して（すなわち労働者階級の利害を代表して）、労働者階級を自分の側にひきよせるためである。「かならず大衆のいるところでこそ活動しなければならない」というレーニンの提

「共産主義における『左翼』小児病」一九二〇年　学習欄④

小ブル急進主義の克服とレーニン戦術思想

綱領・組織・戦術をつらぬくレーニン主義

書かれてあることだけではなしに、何故にかかる小冊子が書かれたのか、その書き方も含めて学ばなければならない。

大衆運動の自然発生性、その左派的急進的展開にのみ、依拠し、それをあと追いしているに過ぎない「過程としての戦術」に対して、プロレタリアートの経済的解放という大目的に従って、プロレタリアートを支配階級に高める（すなわちプロレタリアートの階級的独裁を樹立する）ための「計画としての戦術」を突き出したのがレーニン戦術思想である。それ故に、宣伝と煽動をとり違えた啓蒙主義や、「革命の見通し」「プログラム」にプロレタリア戦術を置き換えた戦略主義をも内在的に批判し尽しているのである。だがしかし、社帝派に転落した日本共産党が、一時期、ブントを先頭とする革命派勢力―新左翼と総称された反帝国際主義潮流の登場に対し、「『左』右の日和見主義批判」なる言辞をろうして、その革命的突出に敵対するにあたって本書を反革命的に改作していったことの対応の中で、本書の意義が「不当に」低められた経緯があるのも事実である。レーニンのやり方に学ぶなら、まさにヨア特有の日和見主義的動揺と急進民主主義を免がれえないものであり、「無政府主義同様、あらゆる資本主義につきものの社会現象である」。ボルシェビキの成功の一つの基本的条件（第二章）は、まさにこういった小ブル革命主義―ボルシェビキ内の「左翼的」偏向に対する党内闘争に勝利しえた「プロレタリアートの無条件の中央集権と厳格な規律」の堅持である。ドイツの「左翼」共産主義（＝「原則的反対派」）に対する批判（第五章）の中で詳しく展開されているように、この小ブルジョア革命主義は、一方では国家とプロレタリア独裁に対し、あいまいな態度しかとりえず、他方、党―階級問題においては、信じられないくらい「混乱」しているのである。

レーニンの言葉を借りよう。

「『党の独裁か、それとも階級の独裁（党）か？』といった問題のたてかただけでも、とうてい信じられないほどの、手のつけようもない思考の混乱を証明している。」「『大衆』とか『指導者』とかいう現代の『流行』語が、ただもう、軽々しく、何の関連もなしにつかわれていることだけではなしに、何故にかかる小冊子が書かれたのか、その書き方も含めて学ばなければならない。

大衆運動の自然発生性、その左派的急進的展開にのみ、依拠し、それをあと追いしているに過ぎない「過程としての戦術」に対して、プロレタリアートの経済的解放という大目的に従って、プロレタリアートを支配階級に高める（すなわちプロレタリアートの階級的独裁を樹立する）ための「計画としての戦術」を突き出したのがレーニン戦術思想である。それ故に、宣伝と煽動をとり違えた啓蒙主義や、「革命の見通し」「プログラム」にプロレタリア戦術を置き換えた戦略主義をも内在的に批判し尽しているのである。だがしかし、社帝派に転落した日本共産党が、一時期、ブントを先頭とする革命派勢力―新左翼と総称された反帝国際主義潮流の登場に対し、「『左』右の日和見主義批判」なる言辞をろうして、その革命的突出に敵対するにあたって本書を反革命的に改作していったことの対応の中で、本書の意義が「不当に」低められた経緯があるのも事実である。レーニンのやり方に学ぶなら、まさに

起は、まさに党の任務として、このことを言っているのであって、「労働組合を古いやり方ではなくて、新しいやり方でいっそう教育し、それを指導しなければならない」ことこそ重要である。労働組合を通して、それが改良要求、経済闘争であれ、雇主との闘いが賃金奴隷制の結果であることを学ばせ、一方で階級的団結やプロレタリア的規律を身につけさせ、他方で「買収された上層労働者層」から生まれる「労働貴族」―社会排外主義の影響から労働者大衆を解き放っていくのである。無権利劣悪労働条件下に放置されている下層未組織労働者に対しては労働組合の結成をよびかけることからはじまり、同盟系はもとより、日和見主義指導部が支配する労働組合においては、広汎な労働者大衆の力をもって、御用幹部を追放していかねばならない。すなわち「あらゆる犠牲に耐え抜き、最大の障害にも打ちかって、系統的に、頑強に、ねばり強く、辛抱強く宣伝煽動を実行しなければならない」のである。これを回避した「左翼的言辞」は文字通り「空理空論」であり、『左翼』小児病」は「一定の古い形態を無条件に否定し、新しい内容がありとあらゆる形態を通じて、自分の道を切り拓いていくものであることを見ない」といえる。これは、本書においてレーニンが一章を設けて具体的に批判したように（第八章 妥協は絶対にいけないか？）「我々の理論は教条ではなく行動の指針」なのである。

「まさしく許すべからざる妥協、すなわちそこに日和見主義と裏切りがあらわれているような妥協の具体的場合を見分け、これらの具体的妥協に対してはあらゆる批判の力、容赦のない暴露と闘いのすべての切先を突きつけること」と、「妥協を『原則として』否定したり、一般に妥協はどんなものであろうとも全く許されないと否定すること」とは全然異なっており、「迂回、協調、妥協を許さないということだけでも、これはすでに誤まりである」とさえ提起しているのである。もちろん、この「迂回政策、協調、妥協」は、敵の動揺につけ入り、利用すると共に、諸階級諸階層に対する共産主義的戦術の具体的適用に他ならない。ボルシェビキは権力奪取後、プロ独下の階級闘争においても、非プロレタリア部分に対する戦術として、すなわち、「プロレタリアートの側にくる部分に対しては、その時期と程度に応じて譲歩し、逆に、ブルジョアジーの側に行く部分に対しては断固として闘うこと」を組織していったのである。

我々は、綱領―組織―戦術を貫くマルクス・レーニン主義の復権を基軸とし、本書における歴史的位置とその背景を踏まえ、レーニン戦術思想を「生きた具体」として獲得しなければならない。冒頭述べたように、「日和見主義、社会排外主義の誤まりにくらべると、千分の一も危険でもなく重大でもない」が、しかし逆に革命派勢力の多くの部分が急進民主主義にとどまり、綱領上の修正主義たる反スタトロツキズムを批判しえていない現在、「計画としての戦術」を根幹とするレーニン戦術思想を小ブル革命主義に対する清算として、学びとることが要請されている。